

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第5号/平成13年12月1日発行 青森県立保健大学広報誌



第2回海外授業

CONTENTS

進学相談会・オープンキャンパス記録……………2	海外授業引率始末記……………12
ハンセン病啓発パネル展他……………3	海外授業同行記……………14
公開講座開催実績他……………4	海外授業体験記……………15
サバティカル研修……………5	教室(領域・分野・職域等)紹介/看護学科……………18
学生自治会記録……………6	// 理学療法学科……………19
インド・カルカッタ紀行……………7	// 社会福祉学科……………20
AOMORI WAVE2001……………8	// 人間総合科学科目……………21
サークル活動紹介……………9	// 事務局教務学生課……………22
大学祭開催記録……………10	内山先生を偲んで……………23

進学相談会を開催(7会場)

開学当初から、入試広報の一環として、高校生に本学をPRし、本学への志願者の確保を図るため、進学相談会を県内外で開催してきました。

今年度は、昨年度より実施会場を厳選し、7会場で実施しましたが、その状況は次のとおりです。

実施状況

(人)

開催日	場所	来談者数	参加教員数
5/21	仙台市	16	3
5/23	八戸市	68	6
5/24	盛岡市	24	3
6/7	弘前市	70	6
6/8	青森市	60	6
6/11	秋田市	21	3
7/19	函館市	16	3
計		275	30

昨年度と同会場と比較すると、来談者数は若干増加しました。

進学相談会は、高校生が大学教員から直に大学の教育内容を聞ける貴重な機会であり、また、大学にとっても大学と入学生のミスマッチを防ぐため、重要だと思えます。

来年度以降も、開催していきますので、ご協力よろしくお願いします。



オープンキャンパスにおける血圧測定風景

オープンキャンパス・進学相談会プロジェクト代表
社会福祉学科助教授 佐藤 恵子

好評だったオープンキャンパス

今年のオープンキャンパスは、8月10日(金)に開催されました。当日は、曇りのち雨というあいにくの天候でしたが、県内の高校3年生を中心に約400人の参加者があり、明るく活気にあふれた一日となりました。

主な開催内容は、第1部(午前の部)で、「本学の理念・教育方針」「学科カリキュラム」「入試情報」などについて学科別説明会を行い、第2部(午後の部)では、参加者が自由に見学・体験できるキャンパスツアーとして、「体験コーナー」「模擬講義」「ビデオ上映」「相談コーナー」などを設けました。いずれの会場も盛況で、担当者の説明に熱心に耳を傾け、緊張した面もちで疑似体験に取り組む参加者の姿が印象的でした。

今年の特徴は、全日程を通して学科別に企画・運営し学科主体で実施したことです。その結果、各学科の特色をはっきり打ち出すことができ、参加者に対しても志望する学科についてより具体的でまとまった情報を提供することができました。

終了時に回収したアンケート(回収率62.6%)の結果をみても、参加者の評価は全般的に良好で、今回のオープンキャンパスを通して、本学に対する関心と理解を深めていただけたのではないかと思います。これが、本学への入学志願につながってくれることを願っています。

今年度の反省点は、開催日程の決定が遅れたことです。そのため、夏休み期間中でしたかも弘前大学の開催日と重なってしまった上、PRも十分できませんでした。このことが、参加者数の減少(昨年度に比べて約180人減)の一因になったと考えられます。次年度はできるだけ早く開催日を決定し、広く周知を図ることが必要です。

最後に、オープンキャンパス・プロジェクトの委員をはじめ、お忙しい中ご協力下さいました教職員およびボランティアの在学生の方々に、厚くお礼申し上げます。

【ハンセン病啓発パネル展】

- 日時／6月25日(月)～29日(金)
- 場所／本学アップルズルーム

「ハンセン病を正しく理解する週間(6月24日～30日)」にあわせて、主に本学学生を対象としたパネル展を開催しました。

本学では今年で3回目の開催となりますが、今回は、ハンセン病資料館所蔵のパネルにより、主に国立療養所松丘保養園の歴史についての展示を行いました。



【学会開催】

- 日時／10月19日(金)～20日(土)
- 場所／青森市文化会館（青森市）
- 学会長／中村恵子（本学健康科学部長）
- 名称／第3回日本救急看護学会学術集会

「21世紀に躍動する救急看護—救急看護の連携・協働の成果に向けて—」をテーマに、第3回日本救急看護学会学術集会が青森市内で開催した。

日本全国から約1,000名の参加者による104題の研究発表と会長講演「救急看護の連携・協働へのストラテジー」の他、シンポジウム、ワークショップ等が行われました。



【実習指導者会議】

- 日時／7月13日(金)社会福祉学科
9月23日(日)理学療法学科
- 場所／本学

本学学生の実習施設の方々を本学に招き、今後の実習計画等にかかる説明を行いました（学科により、開催内容は若干異なります）。

【青森市献血推進協議会からの感謝状贈呈】

- 日時／7月4日(水)

県内の44団体、及び7個人に対して、青森市献血推進協議会会長（青森市長佐々木誠造）から感謝状が贈呈されました。（本学は、年間2回以上献血を実施し功績が著しい団体として該当）

市内大学では本学のみが該当。

【教職員親交会ボーリング大会】

- 日時／9月4日(火)
- 場所／イーストボール



開学3年目の本学で初めてのスポーツイベントとなる第1回学長杯ボリング大会を開催しました。基本的に、男女・年齢等による一律のハンデにより個人戦で実施しました。

初めてにしてはまずまずの40名の参加により、学長杯トロフィーを争った結果、優勝は事務局企画情報課日野智之主事でした（トータルスコアは326点（スクラッチ））。

【平成13年度北東北地区大学 ガイダンスセミナー】

- 日時／9月5日(水)
- 場所／アラスカ会館（青森市）
- 主催／北東北地区大学ガイダンスセミナー実施委員会、独立行政法人大学入試センター

「入学者選抜方法の多様化と高等教育の課題」をテーマに開催された標記セミナーに、本学としては初めて参加しました（中村学部長、大和田社会福祉学科長、事務局）。

また、「保健医療福祉系公立大学の推薦入試について」をテーマに、パネリストとして本学伊藤日出男教授が参加しました。

参加者総数100名（青森県、秋田県、岩手県の大学、高等学校関係者）

【地域保健福祉研修会】

- 日時／第1回9月21日(金)、第2回10月27日(土)
- 場所／本学
- 主催／本学健康科学研究研修センター

第1回：元気になる在宅ケア（講師／聖路加看護大学 川越博美教授）、第2回：保健婦・士の活動と教育のあり方（講師／慶応義塾大学 久常節子教授）をテーマに本学で開催。

対象は、青森県内の市町村保健婦・士、保健所、介護支援センター、訪問看護ステーション、福祉系の施設、本学実習施設の職員。

参加者数 第1回、第2回とも約100名

【公開講座開催実績】

本学公開講座委員会では、平成11年度の開学以来、毎年計4回の公開講座を実施しています。

今年度は、「こころと健康」を基本テーマに以下のとおり実施しました。

＜＜第1回目 6月4日(月)＞＞

「いのちを考える」

講師：柳田邦男（ノンフィクション作家）

＜＜第2回目 6月29日(金)＞＞

「病氣をつくる家、健康をつくる家、そして、こころを蝕む家、こころを育む家」

講師：金谷年展（社会福祉学科助教授）

＜＜第3回目 9月29日(土)＞＞

①「健康な社会—いのちを救うネットワーク—」

講師：中村恵子（健康科学部長、看護学科教授）

②「女性問題としての幼児虐待—追いつめられる母親たち—」

講師：佐藤恵子（社会福祉学科助教授）

＜＜第4回目 10月20日(土)＞＞

①「フィジカルメディテーション～ヨガ・太極拳～」

講師：ジョナサン・ウォルシュ(理学療法学科講師)

②「こころからだ—からだが不自由になったとき—」

講師：藤田智香子（理学療法学科講師）



第1回目公開講座で講演する柳田邦男氏

やっぱり英語は大変だ！

人間総合科学科目教授 赤坂 和雄

少しは英語がわかると自負していた私でしたが、これほど英語に苦勞したことはありませんでした。英語がわかれば世界のどこの人でもコミュニケーションを取れると言われていました。しかし、その英語にも色々な種類があることを今回のサバティカルでいやというほど思い知らされたのです。英語といっても色々ななまりがありそれらの英語に慣れるのにかなりの時間が必要でした。コミュニケーション研究を看板にぶら下げての海外研修でしたので、四苦八苦でしたが文字通りの研究ができたと言えるかも知れません。

英語といえば Queens English とか American English などを思い浮かべるのが一般的でしょうが、世界には驚くほどの種類の英語が存在していることを再確認せざるを得ませんでした。これが英語かと思われるほどの妙な英語がこの世をまかり通っているのですから驚きでした。この地球上には英語を公用語として使用している国が、なんと、25か国もあるというのですから色々ななまりやアクセントの英語が存在しているといっても驚くべきことではないのかも知れません。

今回は北米の他ニュージーランド、それにヨーロッパ4か国を研究調査の対象国としましたが、それら個々の国々の言語がわからなくても共通言語は英語でした。ドイツやスエーデン、デンマークなまりの英語であったり慣れるのに時間はかかりましたが、使っている言語が基本的には英語ということもあり、共通の理解を得るのにはさほど困難がなかったのも事実です。そんなことから、当保健大学の英語教育の担当者はイギリス、オーストラリア、ニュージーランドそれにアメリカ人で、ほぼ理想的な教育体制をとっているのかな、などとひとりほくそ笑んでいました。

英語で一番苦勞したのは、バス運転手や電車の車掌さんの案内でした。何を言っているのか

全く理解できないことがしばしばでした。彼らにとってはごく当り前のことかも知れませんが、私たちガイジンにとっては真剣そのもので、どこで下車したらいいのかさえわからなくなるのです。シカゴでのことでしたが、ある時行き先を十分確かめて乗ったのですが、まっすぐ行くはずのバスが途中で右折し始めたのです。あわててドライバーに尋ねたのですが、そのドライバーが言っている英語が全く理解できず何度も繰り返しをお願いしたのですが、ドライバーの言い方は全く変わらず黒人独特のアクセントや言い回しで結局は捨てゼリフを置いて降りなければならぬ羽目になったことを思い出すと今でも腹が立ちます。

シカゴのバスの中でバス運転手募集の広告を見ました。運転者としてのいくつかの資格に客とのコミュニケーションが上手に取れる者という項目がありました。日本の広告では見たこともない項目でした。アメリカの中でもこのようなことを入れなければならない状態にあることを認識し、コミュニケーションが如何に難しく大切かを感じたサバティカルでした。



友人のマーティとパットと（自宅アパートで）



ガバナズ州立大学院教授と（卒業記念パーティにて）

「自治会長として保健大学をみる」

保健大学は今年度で3学年揃いました。私にとっては初めての後輩もできました。うれしい反面、先輩という立場に戸惑いもしました。そのような中、初めてこなした仕事が入学式での自治会長としての挨拶でした。新入生以上に緊張していましたが、何とか祝辞を読み終わることができて胸を撫で下ろしました。今では、この挨拶がきっかけで多くの新入生と知り合うことができてよかったと思っています。

3学年も揃うと学内も賑やかです。特に食堂は混み合っ、なかなか昼食にありつけないこともしばしばです。一方で、サークル活動も盛んになってきていると思います。今年度も新規のサークルがいくつかできました。また、去年以上に活動が盛んになったサークルもあります。そんな光景を自治会長として見て、とてもほほえましく感じています。

夏休みにはオーストラリア研修がありました。私自身は参加をしなかったのですが、参加をした学生の話を知ると、みんな「大変ためになった」ということでした。ホームステイをしながら大学で授業を受けたり、現地の医療施設を見学したりしていたということです。他国の医療現場を見学することは、貴重な体験であったのではないかと思います。なんと人によっては、現在もステイファミリーとEメールを続けているようです。このような関係を私はうらやましく思います。

後期に入り、大きなイベントがありました。大学祭です。大学祭では、私は実行委員長として大学祭が成功するよう努力を重ねました。模擬店や企画の募集に始まり、企業協賛金のお願い、花火の実施など多くの仕事がありますが、実行委員や事務の方々の協力もあり、大きなトラブルもなく全ての仕事を滞りなくやり遂げることができました。この場を借りまして、お礼申し上げます。また、今年度のノウハウを活かして来年度の大学祭は私の後輩が中心となってさらに充実した大学祭

学生自治会2代目会長
(理学療法学科2年)

樋口 大輔



を作り上げてくれると思っています。反省点としては、実行委員会の活動自体が夏休みを挟むことで、どうしても中断せざるを得なかったということです。次に、実行委員長である私自身が情報収集を十分にできていなかった点があったということです。以上の反省点を来年度の実行委員会ではクリアして欲しいと思います。

現在の大学の様子は、一言で言えば「慌ただし」という言葉がぴったりだと思います。3年生は実習で病院の方へ行って、大学にいないことが多いですし、2年生も学科によっては実習が始まっています。1年生はといえば、後期に入ってからにはさらに授業数も増えて、課題に追われているようです。このような大学は保健大学以外には県内にもそうそうないと思いますが、これが本来の大学の姿であると思います。というのは、私は大学生活をいかに充実して過ごすかが将来を左右すると考えているからです。実際に保健大学の学生は、このように忙しい中、自分の時間を作ったりサークル活動をしたりと、まさに大学生活を充実して過ごしているようです。

今後の自治会としての仕事は、卒業アルバム制作です。そのための組織を結成して、来年度にはすぐに活動ができる体制を作り上げたいと考えています。ほかにもたくさんの仕事は山積みですが、なかなか効率よくできていません。私自身が忙しいこともあります。自治会の活動を支える体制が学生内にできていないことも原因の1つであると考えています。小さな大学ですので、学生のみなさんには自治会の一員である自覚を持ち、いっそうの自治会活動への参加をお願いします。

「旅を通して学んだもの」

看護学科2年
後村 あつぎ

皆さんはインドと聞いて何を思い浮かべますか？おそらく貧困とか、カレーとか、ガンジス川などを思い浮かべると思う。私もこの旅に行くまではこのようなことしか思い浮かばなかった。しかし、インドが本当にそういうものかということが知りたくてこの旅に参加することにした。その中でも、特に印象に残っているのを話したいと思う。

平成13年2月28日、タイのバンコク空港より2時間程でインドのカルカッタ空港に到着した。タクシーに乗ろうとしたときに、多くの人々が寄ってきた。なんと荷物をすぐ側にあるタクシーまで運ぶ人々なのである。それによってお金を得るのである。驚きであった。また、タクシーに乗ってからも、6歳ぐらいの男児が「マダム、マダム、お金を下さい。」と寄ってきたり、花を売りにきたりと、テレビで見たことがそのまま行われていた。

カルカッタ市内を歩いていると、売り子が寄ってきたり、乳幼児を抱いた母親が「お金をくれ。」と寄ってきたりした。人が歩く路上には、テントがありそこで生活している様子も見られた。驚くことばかりが目の前にあった。同時に人間はどこでも生きて行けるのだと感じ、人間の生活していく上での倫理が私の中で崩れてしまった。

3月1日、JICA事務所、感染症研究所、感染症病院を訪問した。病院には、コレラ、ジフテリアなどの患者が階ごとに入院していた。患者は何枚かの布が敷いてあるだけの粗末な古いパイプベッドの上にあった。日本にある患者用ベッドとはあまりにもかけ離れていた。インドではこれが普通だと聞き言葉を失ってしまった。

3月3～5日、カルカッタから200km程離れた農村を視察した。200kmとは聞いたが、6時間ぐらい車に乗っていたので、とても長く感じた。小学校や幼稚園を訪問した。ここに通っている子供たちは毎日教育が受けられるというわけではない。カルカッタ市内から教師を呼んでいるため、来られ

なくなると授業はなくなる。また、家の手伝いがあつたりすると学校に来られないこともあるそうだ。先進国では教育を受けることが義務づけられているが、途上国ではこれが現実なのだと感じた。貧困がこれほどまでに人々に影響を与えているのだと感じた。子供たちの栄養状態を考えて、母親たちにも家庭菜園など色々な教育が行われているのだという。

3月7日、mather telsa's houseの中の女性・薄弱者の家でボランティアをした。多くの外国人が、排泄援助、清潔ケアを行った。スクリーンなどのように隠すものがないため、診察台のような大きさのベッドのうえで尿器をいれて排泄していた。これが普通なのだろうが、私が学んでいることとあまりにもかけ離れていることに驚いた。

3月8日、カルカッタレスキューを訪問した。これは、イギリス人の医師が寄付をもとに設立した無料診療所である。カルカッタ市内に多くの診療所があり、多くの市民が来ているそうだ。

この旅を通して、先進国と発展途上国の大きな差を感じた。医療にしても、教育にしても、先進国の助けがなければ成り立っていないものが多い。しかし、いずれ発展途上国は一人で立ち上がり、生きていかなければならない。そのためにも、先進国がただお金や物を送るのではなく、その国にあった技術提供をし、国の人々も学んでいかなければならないと思う。



農村での折り紙作り

新たな祭りその名も「やっちゅー」

理学療法学科3年 三上 綾子
社会福祉学科3年 伊東由理子

若者が中心となって若者の祭りを作る。このテーマを掲げて「AOMORI WAVE 2001 やっちゅー祭」は企画された。青森の皆さんはご存知でしょうが、「やっちゅー」とは津軽弁で「やってるかい」という意味です。要するにノッてる？的意味合いの方言を使い、青森らしい地域性溢れる若者の祭りを作りたかったのです。

伊東：「今考えると『やっちゅー祭り』っていう名前、青森っぽくて良くない？最初は恥ずかしかったけどさ。」

三上：「『やっちゅー』って方言だからみんなに親しんでもらえたんじゃない？」

伊東：「それにしても祭りの準備は大変だったよねー。最初は単に規模の大きい学園祭を作るノリだったけど、だんだん責任のある仕事とか任されて意識変わってきたもん。っていうか営業マン並みに働いてたよね。」

三上：「実行委員の名刺作って、趣意書持参して、協賛金集めに企業回りしたよね。私、広報活動で八戸まで行ったんだって。広報活動が一番しんどかったな。夜もピラ配りとかしてさ。っていうか由理子大学ちゃんと来てた？」

伊東：「大学生は学業が本分ですから(笑)。でもね、TVやラジオに出演するのに忙しかった。しかもダンスのプロモも撮ったし。うちってアイドルじゃない!？」

三上：「…。夜はファミレスで遅くまで企画会議してたよね。」

伊東：「それって会議と称してみんなで食事してただけじゃん!」

三上：「違うよ!ポスターの原案を練ったり、細かいタイムスケジュール組んだり、参加者との連絡調整したり、司会者やゲストとの打ち合わせとかいろいろやったじゃん。」

伊東：「ほんとにその時は首が回らないほど忙しかったけど、今考えると楽しい思い出しか思い浮かばない。」

三上：「たくさんのダンサー、DJ、バンドマンと出会えたし、木村知事も握手できたし。他の大学の実行委員とも交流が深まったし、普段関わりのない多くの社会人と繋がりができたしね。」

伊東：「それは大きいね。そういう人脈って社会に出たら役立つよ。本当にこの祭りは社会勉強になりました!!本番ではなかなかできないディレクターをやらせてもらっていい経験したな。綾子本番はPA(音響)担当だったよね。」

三上：「うん。私の仕事はデモテープをPAさんに渡す



知事を囲んでの開会宣言「やっちゅー」

だけなんだけど、これって重要な仕事だったよ。だって参加者が使用する曲を間違えたら、祭りの進行はストップするわけじゃん。本番は緊張しまくりでした!由理子はディレクターの仕事大変だったでしょ。トランシーバ持って会場を走り回ってたの見たよ。」

伊東：「ディレクターは祭り全体を把握しきやいけない役割だからね。でも実際は周りのスタッフにサポートされて、祭りは成功したって感じです。これだけ規模の大きいイベントのディレクターをやらせてもらって、責任感とリーダーシップを学びました。」

三上：「話し変わるんだけど、会場全体がたんげ(『とても』の意)盛り上がったよね。お客さん総立ちだったし、木村知事の『やっちゅー』ポーズも見れたし(写真参照)、この祭りを気に入って下さったみたいよ。」

伊東：「祭り後も別の機会に木村知事にお会いした時『やっちゅー祭り来年も楽しみにしてるよ』っていうお言葉を頂いたの。こりゃあもう来年もがんばるしかないでしょ!」

三上：「そうだね!来年も『やっちゅー』!!!」

最初はイヤイヤ参加していた私達ですが、今ではこの祭りを紹介して下さった事務局の佐々木さんに感謝しています。青森の名物といたら「ねぶた祭りとかやっちゅー祭り」と言われる位有名な祭りにすることが私達の大きな夢です。その夢を叶えるには、もっと多くの学生の力が必要です。

私達は現在、すでに来年の準備に取り掛かっています。興味を持たれた方は来年の「やっちゅー祭り」を今年以上の物にするために、私達と一緒に活動していきましょう。『やっちゅー』

SNOW CIRCLE

代表(看護学科3年) 野澤めぐみ
(顧問/教授 嵯峨井勝)

「スキー・スノーボードをする」

これがSNOW CIRCLEの活動目的です。約2年8ヶ月前に発足したサークルですが、本格的に活動したのは今年が初めてでして、実績もなく実質的に設立1年目状態なのです。そこで、講師をお願いしたり運営方法を見習わせてもらうためにも、他大学との交流もしています。

あっ！そういや実績ありました。大学祭だけには毎年参加しているんです。一昨年は北海道・東北のスキー場案内。去年はかき氷販売(赤字)。そして今年は、水ヨーヨーを「無料」で皆さんに釣ってもらいました。タダなだけあって、あっという間に品切れしてしまいました。

あともう一つ。2001年3月には八甲田スキー場で合宿し、城ヶ倉温泉に宿泊しました。その時の晩ご飯は、あの「八甲田牛」のすき焼き。ところで、今年はどこへ行こう？と思案中でして。ここはやっぱり、有名リゾートの安比？それともスキーの本場、北海道？などと、夢はどんどん膨らむばかりです。

まあ、ふざけてしまいましたが、基本的にウィンタースポーツがやりたい人は誰でも歓迎です。応用的にはやる気のある人、大歓迎します。もちろん冬だけではなくて夏でも球技や、ねぶた祭りに参加などそれなりに活動はしています。楽しいとは保障できないけど、冬を有意義に過ごすにはもってこいのサークルではないでしょうか。



八甲田合宿にて

芸術サークル

代表(看護学科3年) 小林三千代
(顧問/講師 堀口由美子)

【芸術】特殊な素材・手段・形式により、技巧を駆使して美を創造・表現しようとする人間活動、およびその作品。(新辞林/三省堂)

私たち芸術サークルでは、創作活動・芸術鑑賞を楽しむこと、活動を通し、個々の感性を磨き、豊かな人格を形成することを目的として、各自活動に取り組んでいます。

「芸術」という言葉から、ルネッサンス期の名匠の絵画を思い浮かべたり、古典派音楽・古典バレエなど思い浮かべる方や「個々の感性を磨く」「豊かな人格形成」という言葉に身構えてしまう方もいらっしゃるかもしれません。しかし、「個々の感性を磨く」「豊かな人格形成」というのはあくまで目途であって、全てではありません。磨かれた感性や豊かな人格は、活動を通して、意識しなくても備わってきます。また、芸術とは形式にとられる必要はありません。女性の行う「化粧」も一つの芸術です。創作活動とは、自分が表現したいと思うことを、様々な方法で表現していければいいのです。それに、前述したように、芸術サークルでは楽しむことが大前提です。活動期間中は、好きなことを楽しむことが大切なのです。

と、上記のような建前の下、現在は皆でお菓子をつまんだり、各自講義のレポートに取り組んだりしています。水彩画や油彩画も制作中ですが、実習などにおわれ、完成はまだまだ先のようです。作品の出品なども考えているのですが、完成作品がないことには始まりませんね。

活動期間は毎週水曜日の午後。講義の関係で参加できないメンバーも多いようなので、近い内に月曜から金曜の午後、と活動時間を増やす予定です。

芸術という自己表現の場に触れることは、私たちの心の発達に大変有意義なことではないでしょうか。私たちは、これからも、楽しみながら芸術に触れていきたいと思っています。

「飛躍」を顧みて

大学祭実行委員/広報担当
(社会福祉学科1年) 福田 雄大

2001年10月13日(土)~14日(日)、今年で3回目となる青森県立保健大学祭が開催されました。各学科による模擬店や各サークルによる楽しい企画はもちろんのこと、保健大の特色を活かした体内組成や骨密度の測定など、日常生活ではあまり経験することのできない企画も催しました。また今年も、ハンセン病患者の方々を保健大学にお招きして話を聞くという機会に恵まれ、私達のように福祉に携わる者としては、大変ありがたいと思っています。私個人としては、初めての大学祭を実行委員という形で支えることができ、とても嬉しいです。結果としまして、入場者数も昨年の倍以上を記録し、今年度の保健大学祭は大成功を収めたといっても過言ではないでしょう。ただ、何の努力も無しにそれだけの進展があったわけではもちろんなく、この大成功の影には、実に様々な人々の汗が光っているということを忘れてはならないと思います。これから私は実行委員としての観点から、そのような人々の姿を述べていきたいと思っています。

今年の春、有志で集まった保健大学生たちが大学祭実行委員会を結成しました。目標は当然、昨年以上の盛り上がりを見せ、来年への橋渡しにすること。一つの目標に向かって、一致団結する先輩たちの姿はとても頼もしいものがあり、昨年度の大学祭のテーマであった「わ」というものを改め

て実感しました。昨年のテーマには、地域住民との「わ」を大きく広げよう、という願いが込められています。その「わ」を将来ずっと絶やすことなく残してゆくために、今年も地域密着型の委員会活動を心掛けました。大学祭の「トリ」としての打ち上げ花火を行うに当たって、JRに事前周知し、さらに大学周辺の町会長さんの家を訪問し回覧板を回して頂きました。また、入場者数を少しでも増やすための宣伝として、市内のあらゆる店舗にポスターを貼らせて頂き、一軒一軒の民家に広告をポスティングしていきました。私はこうした活動の真っ只中で、昨年から築き上げられてきた「わ」の強さを感じました。

そして、その「わ」の強さから生まれる保健大全体の信頼があったからこそ、様々な人々の協力が得られたのだと思います。先程述べたJRだけではなく、ポスターと広告作成でお世話になった印刷会社、各学科が模擬店を開くために、テントやコンロなどの物品を貸して頂いた各施設や企業、その全ての人々の協力が、今年度の大学祭を作り上げたのだと思います。

またこの大学祭では、「わ」や「協力」と共に、自身の「成長」も感じる事ができたので、ここに記したいと思います。私は広報担当として、広報活動の仕事を課されました。具体的には、企業の広告を大学祭のパンフレットに掲載する代わりに、その広告の大きさに応じた協賛金を頂くという仕事です。高校の学園祭にはそのような仕事は無かったため、初めは自分の役割に不安を感じましたが、それと同時に少しずつ社会人に近づいているような、嬉しい実感もありました。広報活動は夏休みから開始したわけですが、企業訪問時はもちろんスーツ着用なので、入学式以来の正装に心まで引き締まる思いがしました。予め電話でアポイントメントを取ってから、企業訪問をして協賛金を頂くという仕事をできるだけ繰り返します。一見簡単そうな仕事ですが、今の自分と広報活動前の自分を比較してみると、少しは成長している



多くの人が興味を示した骨密度測定



ハンセン病関連のパネル展示室の様子

ように思います。

具体的には、まず「情報管理能力」がついたことです。一日に三人がかりで複数の企業に電話をかけるため、企業側の返答も当然様々です。そのため、電話した企業とその結果を紙に整理し、次の広報活動日に備える必要がありました。

次に学んだのは「交渉力」です。広報が協賛金を多く集めるには、一企業の掲載する広告が大きい方が良いため、交渉力が不可欠になります。この能力は大学の授業では習わないことですが、社会に出てから重要な力となることは間違いありません。そうした力を大学の時から学ぶことができ、改めて実行委員会の持つ社会性を感じました。

そして何よりも、この広報活動は私に「自信」を植え付けてくれました。活動時、初めはマニュアル通りにしか交渉できなかった私ですが、回を重ねる毎に自信がついてくると、自分なりの言葉で依頼できるまでになっていました。そしてこの自信は、これから社会に出て行く時に、きっと私の背中を押してくれると思います。

また、広報活動以外にも多くの仕事をさせて頂きました。迅速さが要求される仕事、丁寧にこなさなければならぬ作業、とても体力を使う仕事など様々ですが、どの仕事もこれからの私にとって無駄なものでは無く、きっと将来何かの形で役に立

ってくれるに違いありません。何事も経験してみることが大切なのです。

今年の大学祭のテーマは「飛躍」でした。テーマどおり今年の大学祭は大きな「飛躍」を見せ、無事幕を閉じました。しかし、このテーマの本当の趣旨は、今回の大学祭に関わった全ての人が「飛躍」することにあるのではないのでしょうか。私はこの大学祭を通じて、成長できたとは思いますが、「飛躍」できたかどうかは分かりません。ですが、大切なのは「飛躍」を遂げたことではなく、「飛躍」のために上を目指そうとする姿勢なのだと、私は思います。このような重要なことを、今回の大学祭から学びました。そして、来年の大学祭では、先輩たちの築いて下さった「わ」と共に、今いる自分に満足せずに「飛躍」を試みる姿勢を伝え、今年よりももっと素晴らしい大学祭にしたいと思います。

最後になりましたが、第3回青森県立保健大学祭が無事に成功を収めましたのは、紛れもなく先生や職員、各企業ならびに保健大学生の皆様のおかげであります。皆様のご協力がなければ、このような成功は有り得なかったと思います。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

では、皆様の更なる「飛躍」を願いまして、大学祭開催記録を終わりたいと思います。



社会福祉学科2年生による焼き鳥販売

SOMETHING NEW

人間総合科学科目教授
(English Communication 担当)
ノエル・フクシマ

教育の敵はマンネリである。学生の顔ぶれが変わったからといって前の年と同じことを繰り返したのではまず教師の方に発見の喜びや感動が薄れ、それがすぐ学生に伝わってしまう。

初めての海外授業、おまけに到着から出発までの3週間を日本語の通じない家庭に一人きりでホームステイするという強烈な初体験をする学生達にとっては、毎日が「あっ!」「え?」「うそ!」「なんで?」「どうしよう」「そうか」「そうだったのか」エトセトラの連続である。疑問や逡巡の後には発見がある。発見は感動をもたらす。うーむ、初体験済引率教員も発見したい!感動したい!…というわけで、本学の海外授業第2回目の今年は、Something newとして、以下に述べるような新しい趣向をプログラムに加えてみた。

SATURDAY ARRIVAL

昨年の4週間が今年は3週間に減らされてしまったため、その辺のギャップをどうやって埋めるべきかで頭を悩ませた。2単位の選択科目である English Communication の授業時間数は60時間と決められている。そこで週2回の割合で行われる病院等の施設見学や Field Trips の時間の一部を課外授業と見なすことによってなんとかクリアした。問題は学生達がどのくらい早く異文化に適応してくれるかである。昨年は3週間たってもまだカルチャーショックから脱出できず、ホームステイ先での意志の疎通もままならないでいる学生がいた。スタートに問題はなかったか、と考えてみた。昨年の場合メルボルン到着が日曜で、ホストファミリーとはその日の午後、それも旅の疲れを引きずったまま過ごただけ。翌朝から早速授業が始まり、週末までホストファミリーとゆっくり話すチャンスがなかった。これがよくなかったのかもしれない。そこで今年は青森出発金曜日、メルボルン到着土曜日という旅程を組んでみた。そ



みんなニコニコ (左端筆者)

の結果、学生達は日曜日を丸一日ホストファミリーと過ごせた。月曜日に大学に現れた学生達はみんな笑顔で、昨年のように「いまず青森に帰りたい」と泣き出すカルチャーショック患者はいなかった。金発土着は来年以降も続ける価値がありそうだ。

VIA SEOUL

昨年は成田国際空港発着のカンタス航空であった。ほとんどの学生が青森から羽田経由で成田に集結した。が、青森以外の帰省先から成田に向かった学生のひとりが大遅刻して大いに肝を冷やした。だからといって青森発着に切り替えたわけではないが、複数の旅行会社から見積をとった結果JTBが出してきたソウル経由大韓航空オーストラリア行きが一番安かったので「落ちるよ」という声にやや逡巡しつつもこれに決めた。もちろんKE機は行きも帰りも落ちなかったし機内食のインスタント・ビビンバも美味であった。ソウル国際空港では3~4時間の待ち時間がある。日本でならまず話をするチャンスがないような人物が話し掛けてきたりする。後ろの座席からMisakoに話し掛けてきたのはアメリカ国籍を取ったという元日本人男性。「アメリカはすばらしい国だ。もしも世界が減びるなら、アメリカは最後の最後に滅び、そして世界が減びるのだ」と言ったという。まさにその1ヶ月後アメリカはタリバン支配下のアフガニス

タンを壊滅せんと攻撃を開始した。せば、オーストラリアをやめてアメリカへ行こうか。...

GENUINE PERSON

オーストラリア人は相手によってことば遣いや態度を変えることを嫌う。だから時には人を傷つけてしまうこともあるし、自分の弱点を白日の下にさらけ出してしまうこともある。「自分という人間はそれ以上でもそれ以下でもないんだから」と開き直っているようにも思えるが、いつでも誰にでも同じ態度で接しているような人間は Genuine person と呼ばれて信頼される。日本の20倍以上の国土に日本の7分の1の人間しか住んでいないこの過疎国は、特に農村地帯の人口密度が極端に低く、隣家まで300 km以上離れているというケースも珍しくない。この次会えるのはいつのことかわからないといった相手には、だから、全てをありのまま伝えておくのだという。去年も今年も、オーストラリアのホストファミリーは、ほんの数週間生活を共にするだけの学生達を「帰ってきた家族の一員」のようにして迎え入れ、ラポールができたとみるや、日本人なら他人の前では決して口にしないような、自分達の親子関係、夫婦関係、男女関係などについてもありのままを話してくれた。学生達はそんな「内輪の話」を聞かされてまずビックリ仰天した。次に胸を熱くした。「ホストマザーは、自分が2回離婚しているということ、どのようないきさつで結婚し離婚したのか、別れた男性には新しい彼女がいて子供が生まれる、などということをお話してくれました。3週間を一緒に過ごすだけの私に話してくれていいのだろうか、内心おどおどしながら聞いていました。そ

して、その話を聞いていたのは私だけではなく、ホストブラザーもシスターも一人遊びをしながらしっかりと聞いていました。その証拠に、ホストマザーが『私の前の夫は、子供のしつけにうるさいし、かっこよくない』と言った時に、二人ともものすごい剣幕で『私の(僕の)お父さんは世界一だよ』と言っていました。私は、子供のいる前で離婚した男性のことを話すということにも驚いたのですが、もっと衝撃的だったのが、その後のホストマザーの一言でした。『私はそう思わないわ!』 Noriko のレポートである。

Genuine person に価値を置くオーストラリア人は二セモノを嫌う。特別許可を得て学生達と一緒にいったモナシュ大学医学部の解剖学研究室で見たものも全部ホンモノだった。皮膚や筋肉の一部を除去して血管、神経、骨などが見えるようにした顔や手足、胸部、腹部、生殖器、内臓など、あらゆる人体のパーツが、あるものは保存液に入れ、あるものは乾燥させて無造作に並べてあった。



みんなホンモノ

ホームステイ先を訪問して

人間総合科学科目助手 井澤 弘美

現地での私の役割のひとつに、ビデオ撮影がありました。学生がだんだんとホームステイ先の家族と打ち解けて、コミュニケーションが取れるようになっていく成長を撮りたいと考え、また、私自身もホームステイはどのようなものか興味があったので、事前に了解を得ているホームステイ先を訪問することにしました。

現地に到着した次の日に早速ビデオカメラ片手に訪問して、学生の緊張している場面を取ろうと思ったのですが、学生はそこの家族の子どもたちと遊びながら（遊ばれながら？）コミュニケーションをうまく取っており、緊張している感じはなく、学生の適応の早さに少し驚きました。また、ホームステイ先の家族も特別なことをしていません。学生を家族の一員のように接しておりました。後から留学をコーディネートしているスタッフから聞いたのですが、学生を受け入れるホームステイ先の家族に対して、現地の大学ではかなりきめの細かい指導をしているそうです。ですから、学生を受け入れる家族は言わば「プロのホームステイ受け入れ家族」といったところでしょうか。学生が早くからリラックスしていたことが理解できました。

大学で行なわれたさよならパーティーや、帰りのバスの見送りには、多くのホストファミリーが駆けつけてくれました。特にホストファミリーの小さい子どもたちは別れるのが嫌で泣きじゃくっていました。たった3週間でしたが学生たちは家族の一員として生活し、いい体験をすることができたんだなと感心しました。



キャンパス近くのショッピングモールにて

海外授業に同行して

看護学科助手 佐藤 愛

今回、海外授業に同行するにあたり、正直に言って複雑な心境でした。理由は色々ありますが、英語の得意でない（あえてできないとは言わない）私が同行してほんとにいいのか？とっていました。しかし、実際にはそんなことは全く関係なく、学生は生き生きとオーストラリアでの生活を楽しんでいました。ホストファミリーの方々はもちろん、クラスの先生方や現地のスタッフの方々が万全の体制で、温かく学生を受け入れてくださっていて、本当に感謝、感謝でした。

私に課せられた使命は、学生達のデジカメ撮影でした。授業での真剣な眼差し（？）、施設訪問での興味津々の顔、オプションツアーでのリラックスした笑顔、ホストファミリーとのほのぼのの風景等しっかり撮らせていただきました。ホストファミリーとの別れのシーンはみんな涙々（天気も雨だった）ですごい顔だったので控えましたが…。

毎日のように学生と行動をともにしてきて印象深いことは多々ありますが、そのうちの1つはモナシュ大学のアナトミーメディカルミュージアムを見学した時でした。本物の手や足、心臓などの臓器の標本を手にしてにっこりカメラに微笑む彼らはとても頼もしかったです。嬉々として通訳するAACEのスタッフの方やビデオを撮る井澤先生もすごいと思いました…。

昨年より1週間少ない日程でしたが、「今までの何年分にも匹敵する3週間でした。」とある学生が言っていたように、学生全員それぞれにとってきっと内容の濃い充実した3週間だったのだろうと思いました。【私にとっては、思っていたより寒くて（聞いてはいたのですが）学生からの「風邪を引いた」との報告にドキドキした3週間でした。】



ものすごく寒かったけどきれいだっGreat Ocean Road

初めてのホームステイ

看護学科2年 小林 サラ

今回の海外研修で私は初めて一人でホームステイを経験した。知らない人の家庭にホームステイするということが最初は不安や戸惑いを強く感じていた。しかし今振り返ってみると、ホームステイをしたことによりオーストラリアの文化や生活習慣を身近に感じ、より理解することができたと感じる。



私のホストファミリーは80歳を超える老夫婦だ。初めて会った時、彼らの恰幅のよさと背の高さに圧倒された。小さい子供もペットもおらず、毎日何をして過ごせばいいのか、何を話せばいいのかと憂鬱になり、家族や友人が恋しくなった。しかし二人とも80過ぎとは思えないほど元気で陽気で、休日は私のためにドライブやピクニックなど色々計画してくれた。彼らの明るさに触れ、打ち解けるのにそんなに時間はかからなかった。一緒に料理をしたり出掛けたりしている中で日本とオーストラリアの違いを発見し、それに気付く度大きな驚きと喜びを感じた。私の英語力は1年次の英語の授業が終わってから全く英語に触れていなかったため確実に落ちていた。ホストマザーは「とにかくしゃべりなさい」と、絵を書いたり辞書を引いたりするつたない英語を一生懸命聞き理解しようとしてくれたので、時々伝わらないことはあったが苦にならずに生活できた。英語を母国語とする地へ行って毎日英語を使って生活したことは日本で漠然と英語を学ぶより実になったと感じている。

今回の滞在はちょうど生活に慣れて楽しくなってきた頃の帰国となったので残念だった。しかし、オーストラリアで3週間も1人でホームステイをしたという経験は自分を大きく成長させ、勇気や自信がついたと感じている。新しい知識もたくさん得、多くの出会いもあった。今回の経験は私の人生に大きく影響したと思う。私を実の孫のように可愛がって下さったホストファミリーの方々をはじめ、私達のために協力して下さいました皆さんに心から感謝したい。

英語を学ぶこと

看護学科2年 吉田 浩子

約3週間のオーストラリア研修はわたしにとって、とても重要な経験となりました。私は中学校・高校とずっと英語が苦手で、そのため英語に関することにはなるべく避けるようになっていました。だからこの研修で英語に対する意識を変えたい、変えなければならないという思いがありました。英語への不安とは逆に毎日が楽しくて、とても有意義な時間でした。しかし、自分の英語能力の低さは知っていましたが、これほど英語を話せないものかとよく落ち込みました。私はロンダという笑顔の素敵な先生のクラスで毎日楽しく英語に接することができました。この3週間で英語がペラペラになったわけではありませんが、研修前よりも英語が好きになりました。「わからないことは恥ずかしいことではない。恥ずかしいことは、わかったふりをしていることだ。」とロンダに教えられ、授業中に質問することに対する恥ずかしさがなくなったような気がします。英語が世界の共通語となった現在、多くの人々を対象に働いていく者として、英語で会話できることが必須条件であると思います。私の英語での会話はまだまだであり、相手の気持ちをきちんと理解できるまでは達していません。自分の英語能力の低さを痛烈に感じ、自分に何が足りないのか、何をすべきなのかを知ることが出来ました。今回のオーストラリア研修が英語を勉強していくうえでの到達点ではなく、始まりであり、もっと英語を勉強したいと思うようになったきっかけでもあります。今後この経験をもとに、自分に足りないものを補っていかうと思います。



日本に帰る日の朝、ホストマザーと

褒めることのすばらしさ

理学療法学科2年 坂本加那子

オーストラリアで生活してみて気がついたこと。それは、家族同士での褒め合いである。例えどんな小さな出来事でも「それはすばらしい。」と言い褒めるのだ。

人は褒められるといい気分になり、やる気があるのではないかと思う。少なくとも私はそうだ。だからホストファミリーに褒められた時はすごくうれしかった。私を褒めるだけでなく家族内で褒め合う場面を多々見受けられた。日本では、親が子どもを褒めるような事はあるかもしれないが夫婦同士で褒めあう事は果たしてみた事があるだろうか？私のホストファミリー夫妻は毎日のように褒め合っていた。夕食の時は必ずと言っていいほど「おいしい！」と言っていた。それは日本で言ういただきますやごちそうさまのように決まり文句かのようにであった。私もいつからか必ずホストマザーに「おいしい。」と言うようになっていた。そう言われた本人は嫌な思いなどするわけがないだろうしから褒める事によってお互いの気分がよくなる言葉である。

日本では最近、家族間で褒めあう事をしていないように思う。妻もしくは母がご飯を作る事を当たり前前に思っていないか？そしてそれに対して褒めることを忘れてはいないだろうか？もはやオーストラリアでは褒める事が当たり前かのようなものに対し日本では"当たり前"の意味が異なる。確かに日本はオーストラリアとの文化の違いによって褒める事は照れくさい事だと思う。私は、オーストラリアに行き、改めて人、特に家族と褒め合う事の大切さを知ったのだった。

褒めるという事はその場の雰囲気や和やかにしてくれると思う。そして家族の絆を確かめる最大のコミュニケーションだと私は考える。



ホストファミリーの庭、大きなプールと利口なベンソン(犬)

悪戦苦闘!?

理学療法学科2年 鈴木 啓介

オーストラリアに行ってきた友達によく聞かれることはコミュニケーションが図れたのかということである。私の場合、事前に特に英語の勉強をしたわけでもなく、気休めに英会話の本を買ってオーストラリアに持っていった。しかし、その本を見たのは韓国からオーストラリアへ行く機内だけで、後は全く使わなかった。言い換えれば使えなかった。MONASH大学に到着して、ホストマザーに紹介されるとすぐに速すぎる英語で話しかけられ、雰囲気とイメージでどうにか会話を成り立たせた。始めのうちは知ったか振りと笑ってごまかすの二つを使い分け、後は知っている単語を適当に並べ、相手に理解させた。英会話の本が使えなかったのは、それに載っているような状況は殆どなく、いちいち調べていたら話が先に進んでしまい会話が成り立たなくなってしまうからだ。文法や発音が間違っているけど何とかかなと思った。最初の1週間は筆談のような感じでファミリーに単語を書いてもらったり、辞書で調べてもらったりして、コミュニケーションをとった。1週間もすると会話のスピードにはついていけるようになり、それまでよりも濃い内容の話ができた。しかし、ボキャブラリーの問題はどうしようもなく、遠まわしではあったけどわかりやすい文に言い換えてもらいようやく理解できるということが数多くあった。ファミリーの人たちは私が笑顔になると理解できてないということを理解し、簡単に教えてくれた。今回の語学研修を振り返ってみると英語学習だけでなく自分にとって未知なことを多く体験でき有意義な3週間であった。次に行く機会があればもう少し話せるようにしたい。



MONASH大学でCathy先生とclassmate

百聞は一見に如かず

社会福祉学科2年 尾毛川知乃

この3週間の体験を短い文章にまとめるのは容易なことではない。これまでの学生生活を振り返ってみてもこれほど充実して学習したことはなかったといえるであろう。話したいことをうまく話せないもどかしさや言葉がなくても意志疎通ができることなど実際にその場に立ってみなければわからない、自分だけにしかできない非常に貴重な経験ができたのである。

私がオーストラリアで感じた人間のあたたかさは日本ではとても考えられないものである。ホストファミリーは本当の家族のように私を受け入れてくれ、近所の人や道ですれ違う人、運転中の人までもが笑顔で"Hello"と挨拶をしてくれたのである。たったそれだけのことで私は安心して元気が沸いてきた。言葉もしっかりと話せない状態で、他人の家に泊まり、大学に通うなどという非常に不安だらけの生活をしている私を彼らは笑顔で受け入れてくれたのだ。これほどのあたたかさを日本では感じられるだろうか。大量の車と人が忙しそうに空しく道を過ぎて行く日本の姿を考えると寂しくなった。そこで、私はできる限りオーストラリア式で行動しようと考えた。卒業式の挨拶は用意した文章を読まずに、ビッグスマイルで顔を上げ、今の気持ちを語った。

「できることなら帰りたくない」と言ったところ多くの人が大笑いした後、とてもうれしそうな顔をしていた。普段なら誰かに押し付けたくなる人前での挨拶を堂々と成し遂げた私は爽快感と満足感でいっぱいだった。

体験談を聞くことはおもしろいであろう。しかし、私はぜひ多くの人に自らの生の体験をし、3週間で得られるものの多さを実感して欲しいと思う。



ホストファミリーが飼っている“カブチーノ”約2歳 皆彼女のことを“チノ”と呼ぶので私が返事をしてしまい大笑いでした

初海外

社会福祉学科2年 下平 英範

この度の留学は、私にとって初めての海外ということもあって、短い間でしたが得ることはたくさんありました。そして、とても楽しむことが出来ました。例えば、英語はもちろんのこと、一部でしたがオーストラリアの医療・保健・福祉分野のことを知ることが出来たことは、今後の日本での勉強に役立つ要素が多分にありました。オーストラリアは、日本と同じ様な問題を抱えていたり、日本より進んでいるところ、日本にはない部分など得るところはたくさんありました。これ以外にも、いろんなことを学ぶことが出来たのは、ホストファミリーを始めとするオーストラリアの方達と日本の先生方のお陰です。その方達がいなければ、今回の留学は成功し得ないと感じたし、感謝したいと思いました。特に、ホストファミリーの方達には、オーストラリアの文化や自然を知ることが出来た上、今まであまりしたことがなかった「魚釣り」を体験して、楽しみを得ることが出来ました。その「魚釣り」を通して、オーストラリアの自然の広大さ・偉大さを感じることが出来ました。その広大さは、オーストラリアの方々にも通じて感じる事が出来ました。それは、オーストラリアの大半は移民の方であるからです。今回は、他の大勢の友達と海外に来ましたが、今後機会があれば、少人数若しくは個人で海外を旅したいと思った。なぜなら、海外経験は前述してあるように得ることは多分にあるし、自分の視野が広がることなど、私にとって有機的な効果を与えてくれるからです。最後に、オーストラリアに行って、日本の大事さも感じる事が出来たのは、良かったと感じました。



楽しくも悲しいお別れ会

成人・老人看護学講座

ニュースで紹介されていますが、第3回日本救急看護学会学術集会が、中村恵子教授を会長に青森市で開催されました。大会運営を影から支えたのが本学成人・老人看護学講座の助手の先生方でした。

成人看護学は成人期にある人々を対象にしていますが、その病期に沿って時間軸から学ぶ「経過別看護援助論」と、人間の発達と健康レベルの観点から学習する「成人看護援助論」という科目で構成されています。経過別では、生命の危機に瀕した命を守り、障害を最小限に食い止める「急性期にある患者の看護」、「クリティカルケア」、病気や障害とともに人生を生きていくために必要な知識や技術を学ぶ「慢性期にある患者の看護」、病気や障害による活動や社会参加の制約から生活を再構築し、自立を支援する「リハビリテーションケア」、「クリティカルケア」、人生の終わりを看取る「終末期患者の看護」、「ターミナルケア」があります。このうち「クリティカルケア」、「リハビリテーションケア」、「ターミナルケア」は選択科目です。そして、「経過別看護援助実習」では、講義で得た知識を活用して、病院で実際に看護を体験します。ここでの学習は病む人のケアを学ぶために中心的で、重要なものです。

一方、65歳以上の人口が17.2%と、高齢社会を迎えた日本では高齢者が健康で自立した生活をいかに長く維持できるかが、大きな課題になっています。そのため、看護の場も病院から施設、在宅へと広がってきています。こうした背景をふまえ、老人看護学領域では、「老人看

護援助論」を学び、「発達援助実習(老人)」へと展開する際には、病院だけではなく老人施設でも実習します。また、選択科目では「痴呆老人ケア」をとりあげます。

学生にとっては人生の未体験ゾーンを学習する上に、一番活力あふれる青春時代に、最も弱者である病気や障害を持つ人あるいは年長いた人の境遇を想像する力が要求されます。それは大変難しいことだと思います。ですから私たち教員は、どうしたら学生の皆さんがよく理解できるか、アイデアを結集して工夫と苦心を重ねています。

各教員は授業と併行して独自の研究課題を持って活動しています。特に中村教授は健康科学部長としての重責に加えて、学会開催や臨床と教育を結ぶ、“ユニフィケーション”導入に関する研究および日本看護系大学協議会“高齢者の介護サービス提供者に対する教育・訓練事業支援モデル開発事業”の青森ワーキンググループの責任者として精力的な活動をしています。講座の全員が共同あるいは個別にこれら研究・事業に参加しサポートしています。

これに平成13年4月からリハビリテーションケアを専門とする石鍋教授が加わり、老人看護学担当でパイリンガルの堀口講師、出産・育児で人間的な幅を広げた鳴井講師が周囲を固めています。臨地実習では阿保、館山、三浦、本間、吹田、出貝の6人の助手が看護婦としての経験を十分に発揮して指導に当たります。

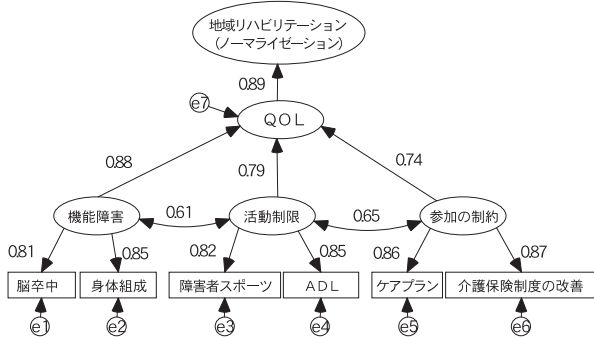
イベント好きで忘年会の余興ではいつも際立つ活躍をし(まだ2回ですが)、薬研温泉のサマーセミナーで結束力を高めている私たちです。

(文責 石鍋)



後方左から吹田助手、三浦助手、本間助手、出貝助手
手前左から館山助手、中村教授、石鍋教授、堀口講師

インパクトのある研究を目指して



理学療法学科教授 福田道隆

理学療法学科内のワーキング・グループ活動の一端を紹介します。名前はまだ付いていないグループです。強いて名を付けると「共助」グループともいえるでしょうか。図のような構造方程式モデリングによるパス解析(AMOS 4.0)から内容を判断してください。いずれも統計学は得意の人の集まりです。脳性麻痺、脳卒中、手の外科の研究からスタートして、現在は脳卒中病巣の3次元表示の開発、変形性関節症に対する鍼治療のEBM(証拠に基づく医療)、骨粗鬆症の治療などが研究のテーマです。

理学療法学科助手 桜木康広

21世紀を迎え、少子高齢化が進むなか保健・医療・福祉の分野の改革が進んでいます。そこで、脳血管障害等の発症後、障害を持った人々が急性期から回復期そして在宅生活へとスムーズに移行でき、その人にとって最高のQOLを獲得できるためのケアマネジメントの在り方を



を探っています。そのために、現場の生の声を拾い上げ、今後制度が有効かつ効率的に運用できるように理学療法士として介護支援専門職員としての立場から研究しています。

理学療法学科助手 齋藤圭介

脳卒中の方々が、身体に後遺症を持たれても、可能な限り地域で質の高い自立した生活を送っていただくために、リハビリテーションの立場からどのような支援が出来るのかについて研究をしています。現在は、自立度の測定尺度の開発を中心に取り組んでおり、その維持向上に寄与する要因を解明していきたいと考えています。

理学療法学科助手 三浦雅史

現在の研究内容としては、スポーツ選手(もちろん、障害者スポーツも)に対する理学療法です。とりわけ、急性・慢性スポーツ外傷予防の観点からメディカル・チェックを中心に実証的検証を行っています。また、等速性マシンを用いた筋力測定の信頼性・妥当性に関する検証も実践しています。その他、呼吸循環器系応答の側面から中高年者、高齢者の健康増進・維持に関する検討を実践しています。

理学療法学科助手 李相潤

人間には各個人が持っている身体構成分布があり、それらは「原子、分子、細胞、組織」に分類でき、加齢とともに大きく変化します。中でも脂肪率の変化は、様々な病気を引き起こす要因として多く知られており、健康管理の側面から高い関心を示しています。現在の研究は、身体組成と体力に関する研究を行っています。

理学療法学科助手 盛田寛明

在宅障害者の日常生活活動の自立を阻害する要因に関する研究を行っています。在宅障害者の生活の質(QOL)を向上させるためにも日常生活活動能力を高めることが大切です。最近では、在宅高齢脳卒中後遺症者の日常生活活動と身体機能・環境・心理の各要因が、どのようにどれ位関係し合っているのかについて分析しています。

向かって左上から右へ三浦助手、齋藤助手、盛田助手
向かって左下から右へ桜木助手、福田教授、李助手

介護福祉分野

福祉の原点に立ち返って共に考える授業を (助教授/露木敏子)

「パンが無くて飢えるより、こころや愛の飢えのほうが重病です」。1981年4月初来日した際のマザーテレサの言葉を思い出します。また、日本人は「豊かさのなかの貧しさ」それに気づいていないと指摘されました。我が国は世界に類のない速さで高齢社会を迎え、国は平成元年に「高齢者保健福祉推進十カ年戦略」・ゴールドプランを策定し、さらに2000年にはゴールドプラン21で介護保険をベースにして「いつでも、どこでもをモットーに、質・量両面からの良質の介護サービスを提供する」ことを提言しております。お年寄りにとって果たして安心の生活がやってくるのでしょうか？

或る特別養護老人ホームを訪ねた折り、寝たきりゼロを目指して、どのお年寄りも小綺麗な装いで車椅子に座らせられ、大広間に集合していました。しかし、お年寄り同志に会話がないうです。お年寄りのお一人に声を掛けてみました。久しく個人的な交流がないうらしく、言葉がスムーズに出てこない。それでも私への配慮からか、言葉を選びながら、三人の子育ての苦労話、15年前まで小学校の教師として30年間奉職していた頃の経験談等、いきいきと語り始めたのです。その瞳は輝いて見えました。やっと会話に弾みが出てきて、ジョークさえ加わってきた頃、寮母さんの言葉掛けで、お年寄りは居室へ帰って行きました。お年寄りの思惑と介護方針が必ずしもかみ合っていないのでは……………。

自己主張のできないお年寄りや障害者にとって利用者の四つの権利(安全・知る・選ぶ・意見を述べる)は現実的には建前のみになってはいないか?、「早くお迎えがこないかな!」とお年寄りをそのような心境にさせているとしたら、マザーテレサの述べた「心の貧困」に他ならないのではないか、福祉の専門職として常に原点に立ちかえり謙虚な気持ちで利用者の本心を深く理解しようとする努力をおろそかにしてはならないでしょう。

もう一度マザー・テレサの言葉を拝借しよう。「恵まれない人々にとって必要なのは多くの場合、金や物ではない世の中で誰かに必要とされているという意識なのです」と人間として尊厳をもって生きることの大切さを強調しています。

限りなく筋肉痛は続く……………

(助手/加賀谷真紀)

現在、介護福祉士として仕事をしている経験を生かし、露木助教授の介護福祉論の授業の中で行っている1年生の「介護体験」や、社会福祉現場実習前の3年生の「介助の仕方」の練習などに関わらせていただいております。

そのため、少しでも介護技術を向上させたいと考え、今年8月、紙屋克子先生のナーシングバイオメカニクスに基づく「生活支援技術」セミナーに参加いたしました。

今回のセミナーでは、「介護者自身が繰り返し練習を重ね、その技術を習得することによって、いかに介護者、要介護者の身体への負担の軽減がはかれるか」をご教授いただき、改めて「快適な介護」について考える機会を与えていただいたように思います。

また、新しいものを学ぶことへの緊張感は、自分自身にとって限りない筋肉痛を産みだす結果となり、日頃の運動不足と練習不足をしみじみと味わうことにもなりました。このように、まだまだ修行が足りない私と介護との関わりですが、研究分野でも「介護」や「福祉ニーズに関わるボランティア」に関することなどを中心に行っています。

今後も、介護に関すること、例えば要介護者や介護者にとって安全で快適な介護を提供するためには、どのような介助方法が妥当なのか等々について日々研鑽を積んでいきたいと考えています。

従って、まだまだ筋肉痛は続きそう…なのです。



向かって左から露木助教授、加賀谷助手

「人間総合科学」という学際的リベラルアーツの中で探究したいこと、教授したいこと、支援したいこと
(講師/浅田 豊)

本学の教育理念の支柱でありますヒューマンケアの提供できる人材育成、つまり①知識・技術・態度の側面での高度な専門性、②相手を尊重し、思いやりの心を持ち、あたたかい人間関係づくりができる豊かな人間性、③地域の特性やニーズを的確に把握し地域社会へ貢献できる資質、を兼ね備えた人材の育成の基礎・基盤となるのが人間総合科学科目であります。

人間総合科学科目はその名が示すように、①多大な蓄積を持つ人文・社会・自然科学という諸科学の枠を超えて総合的観点から人間を理解するという視点、②自ら考え判断することを通して、主体的に学習を展開するという視点、③論理的思考を展開し、科学的かつ客観的に問題を解決するという視点、を概念的基軸とします。そしてこのような概念を具現化させたものが、実践参加型の英語授業やコンピュータを利用した情報処理能力の修得、自己学習能力を育成する基礎演習などを内包する33の科目群になります。

そういった科目群の中で、わたくしはゼミナールとして「人間総合科学演習」を、講義として「グローバル社会と文化」、「調査と科学的方法」という科目を受け持っています。ゼミでは、「感性を育む教育について考える」というテーマのもとで、①多様な自然体験・生活体験を伴った子どもの感性の教育のあり方について、具体的諸例を通じて考察すること、②将来保健医療・福祉サービスに従事する学習者(ゼミ参加者)自身の問題として、「感性をはぐくむこと」を考察すること、に主眼を置いた授業展開をしています。

また、2つの講義科目はオムニバスで運営していますが、わたくしの果たす役割は、教育社会学・教育人類学的領域と、質的・記述的調査研究方法論の領域からの授業内容の提供となります。「グローバル社会と文化」では、諸外国の教育問題やグローバル時代の国際感覚に関して理論と実証の両面から講じるとともに、授業ごとにディスカッションのテーマを与えて、学生参加のグループワークを取り入れてきました。「調査と科学的方法」では、社会科学の方法に基づく研究論文・調査報告の作成方法の基礎を講じるとともに、論理的思考と自己表現力を向上させることを目的としたエクササイズを取り入れ、学

習の中でオリジナルの副教材を用いています。

現在担当しているこれらの教育内容は、わたくしの研究の道程を背景とするものです。これまで取り組んでまいりましたのは、①今日の教育改革と新しい学力観、②家庭・学校



・地域コミュニティの連携のあり方、③幼児教育の理論と実践、④教育方法と評価、⑤開発途上国における教育開発の課題、というようなテーマに沿った考察です。そして本学に着任以降は、前述の研究の応用分野として、看護・理学療法・社会福祉の学科の先生方にご指導を頂きながら、共同研究の形でいくつかの研究課題にチャレンジをしています。

人間総合科学科目は現在、完成年度以降を見据え、社会的ニーズや学部の教育目標などの観点から、カリキュラムの全体的な改訂の段階に入っています。必修・選択科目の学年配置や精選、拡充発展、さらなる体系化等の課題が主要な焦点になっております。こういった課題を達成した上で、成績評価方法の工夫や、学生による授業評価の効果的な実施、メディア・IT環境の整備と充実、単位互換制度に関する工夫等の教育方法面での課題もまた、将来の人間総合科学科目における検討課題になりうるのではないかと考えています。

わたくしはこれからも、「人間総合科学」という可能性に満ちた小宇宙の中で、教育・研究の両面において、学問的模索を続けていきたいと思っています。

(教務学生課長/伊藤貞一)

まだ時間があると悠長に構えていましたが、結局は原稿提出期限が間近に迫り、焦りの境地に陥る。やはりこのパターンは、人間切羽詰まらなければ動かないことの証明と、実は自分自身が教務学生課をよく知らないことが、焦りに陥った最大の要因では、とも感じたところです。

さて、当課の主業務を月別に示せば、

- 4月/入学式挙行、学生ガイダンス、新入生合宿研修、前期履修登録、学内広報誌発行準備
- 5月/授業料等減免・奨学金申請受付、進学相談会開始、入試広報(大学案内作成)
- 6月/後期時間割編成、後期科目等履修生受入準備
- 7月/入試広報(新聞広報、学生募集ポスター)、学内前期試験、入学者選抜要項作成
- 8月/入試広報(受験雑誌広報)、オープンキャンパス開催、前期試験成績管理、海外授業
- 9月/前期追・再試験、集中講義、後期履修登録、推薦・特別選抜募集要項作成
- 10月/大学祭、後期授業開始、前・後期募集要項作成、就職ガイダンス、就職の手引き作成
- 11月/入試広報(ラジオ広報)、推薦・特別選抜試験実施、シラバス・学事暦作成準備
- 12月/前期科目等履修生受入準備、関連施設長責任者会議開催
- 1月/大学入試センター試験実施、集中講義、補講業務
- 2月/一般選抜前期試験実施、集中講義、学内後期試験成績管理
- 3月/一般選抜後期試験実施、後期追・再試験、臨地教授任命式

ほか、学外実習、非常勤講師対応、特別講義・講演、施設見学対応、教務委員会・学生委員会・入学試験委員会・就職対策特別委員会・広報委員会・各9専門部会の開催、各学内会議での課題の検討等々。勿論これら業務の前後の作業量や付帯業務も当然ある訳ですが、スペースの関係上、今読まれてる方々の想像に委ねることとします。

あの開学当時を思えば、今でもゾッとしますが、そんな状態を乗り切ってくれた当課の大事なスタッフとポジションを簡単に紹介いたします。

1. 担当業務とスタッフ

(1)教務担当シマは3名

主幹 横山 哲、主査 小笠原 徹、主事 三浦浩紀

教務委員会、授業計画、シラバス作成、学内試験、履修登録、非常勤講師の管理、学外実習等々。年中忙しい状況下の中でも冷静な判断と愚痴は少な目に黙々と仕事をこなすシマです。

(2)学生担当シマは2名

総括主査 菅 牧子、主事 佐々木真也

学生委員会、奨学資金、学生自治会、学生相談・情報提供等々。学生のための頼れるシマとして君臨。学内・学外に係わらず困ったこと、悩み事、時にはうれしいこと等、何でも相談に来れる学生に愛されるシマを目指しています。

(3)就職担当シマは1名

総括主査 石岡俊一

就職対策特別委員会・専門部会等々。まだ一人ぼっちですが、第1回卒業生の就職のお手伝いをさせていただき、学生の強い味方のシマです。

(4)入試担当シマは2名

主幹 須藤 浩、総括主査 對馬陸夫

入試委員会・専門部会、諸入試関係業務等々。このシマは謎に包まれたシマで、真相を深く追求しない方がいいと思います。

2. 教務補助員(臨時事務手)

看護学科 鹿内光大郎、社会福祉学科 小山内香織

理学療法学科 對馬智恵子、人間総合科学科目 八木橋美幸
教務学生課の所管として各学科等に配置しています。

どうかやさしく取り扱ってください。

ところで今回の紹介に当たり、以前のある資料の文面を思い出しました。

・教務という事務は「授業上の事務」、「学校で授業計画をうまく進める上で必要な業務——。

・国立学校設置法施行規則上、「職員の種類」には事務職員と教務職員があること——。

注目したいのは、国立では事務職員とは別に「教務職員」という職員の位置づけがあることです。我々県職員が大学勤務となった途端に、限りなく戸惑いの世界を彷徨うことになるのが教務学生課の仕事では、と勝手に思っています。

それは事務職員である我々が専門職(教務職員)かのごとく扱われるため?と、勝手な推理は次から次へと続きます。

最後に、その資料にはこんな事も書いていました。「教務」の役割は、教育・研究に当たる教員と学習する学生に対するサービスがあり、①学生の目線、②経験も判断の尺度、③いつも問題意識を持って仕事に臨む……と。

優秀な部下に恵まれて課長としては楽をしておりますが、教務学生課総勢13名はこれからも前述の姿勢を忘れずがんばりたいと思いますので、よろしく願います。

内山先生を偲んで

1. 内山三郎先生の経歴

内山三郎先生は、鹿児島大学教育学部小学校教員養成課程（心理）をご卒業後、関西学院大学大学院文学研究科心理学専攻の修士課程、同博士課程と学ばれた後、昭和50年4月に神戸大学医学部助手、同付属医学研究国際交流センター講師を歴任されて、平成8年4月より神戸大学医学部教授として、また神戸大学大学院国際協力研究科教授としても国際保健学、保健福祉論、保健行政論等々の分野でご活躍されました。

平成10年5月からは本学の入学試験委員会委員、7月からは開設準備委員会社会福祉関係教育研究部会員として、また10月からは教育課程検討会議のメンバーとして、本学の開設準備に大きなご尽力をいただきました。

そして開学後、平成11年4月からは本大学の非常勤講師として「保健福祉概論」「保健概論」をご担当いただき、平成12年4月からは本大学の社会福祉学科の教授として着任されました。



院で学ばれた関西学院大学は社会福祉関係でも著名な教授を擁していることで有名な伝統校であります。専攻こそ違うものの、社会福祉関係の関西在住の教授の人達とも親交が強く、先生の人的なネットの厚さに驚いたこともありました。そのような事情もあったせいも、社会福祉学科の教育カリキュラムや学科運営の方法にとっても理解を示され、ひいては社会福祉士を養成する学生の教育にとっても情熱をもっておられました。

内山先生は、ネパールやタイ、バングラディッシュ等の東南アジアをはじめとする住民の健康問題、地域精神保健、免疫、感染症などの公衆衛生分野の研究者としても大きな足跡を残されております。近年は、保健医療の人材開発、国際交流、国際保健医療教育等多岐に渡る研究視点を持ち、領域を拡大されておられたように見受けられます。

平成12年4月に学科の歓迎会をしたときにも、教育研究についてとても熱っぽく語られ、学科としても先生の見識や指導力に期待するものは計り知れないものでありました。着任後、まもなく体調をくずされ、しばらく闘病生活を続けておられて、「早く戻っていらっしやらないか」と学科が待ち望んでいるさなかの突然の訃報でした。先生にとっても私達にとっても無念の思いは同じではないでしょうか。先生のご冥福を青森の空より心からお祈り致します。

2. 内山三郎先生の死を悼んで

社会福祉学科長 大和田猛

内山三郎先生にはじめてお目にかかったのは、青森県立保健大学健康科学部を立ち上げるために、カリキュラムや組織等を検討するため開設準備室をはじめ各部会の教員の皆さんが様々なご苦勞をされている時期だったと記憶しています。最初は入学試験委員会で、次には大学開設準備委員会の社会福祉関係教育研究部会で、たくさんの議論を重ねながら、先生の厳しくも暖かい見識のあるお話に敬服したことが昨日のように思い出されます。先生は保健大学の教育課程検討会議の構成員としてもそのキャリアと見識をもった有意義な発言をなされていました。そして本学の社会福祉学科に着任なさることをとても楽しみにしておられました。先生は大学を卒業された直後、兵庫県の児童福祉施設に勤務されていたこともあり、又、大学

編 集 後 記

《活彩！保健大学だより》第5号をお届けいたします。アメリカにおける同時多発テロ、米軍のアフガン空爆など暗いニュースが続いています。アフガンの平均寿命は40歳、幼児死亡率25%、衛生設備の整った水を飲めるのは国民のわずか13%、女子の就学を禁止しているアフガンの成人の非識字率64%、アフガンの子供40万人死亡も。アフガンに「冬將軍」忍び寄る…避難民に迫る危機、という新聞タイトルが目に入ります。テロ撲滅のために、この人々の頭上で、砲弾が行き交っているとすれば、そして我々もこれに荷担しているとすれば頭を抱えてしまいます。

広報委員会では来年度の学生募集に向けて、新聞広報活動、受験誌への広報活動、学生募集ポスターによる広報活動、ラジオ広報など例年同様の活動をしています。本誌も県内外に本学学生、教職員の様々な活動を知らせる役割を担っています。忙しい中、原稿を寄せていただいた方々には深く感謝しております。

本号では暗いムードを吹っ飛ばす意味を込めて、明るい写真をふんだんに取り入れました。少しでも明るい気分になれたらと思います。

本号ができる頃には、そろそろ雪が降り始めていることでしょう。雪は人の動きを妨げますが、人を忍耐強くするともいいますのでそれなりの(節度のある)雪は受け入れましょう。本誌をより良いものにするために、皆様の忌憚のないご意見をお聞かせ下さるよう御願いたします。(広報委員長／竹森幸一)

◎広報委員会委員

竹森幸一、赤坂和雄、勘林秀行、堀口由美子、鈴木保巳、伊藤貞一

◎記録専門部会

秋庭由佳、李相潤、田中志子、志賀文哉

◎事務担当

大谷順一(対外広報担当)、
對馬睦夫(入試広報担当)、
佐々木真也(学内広報誌、広報委員会事務担当)